

38
光村 小国 428

垣内松三著

と あ 足

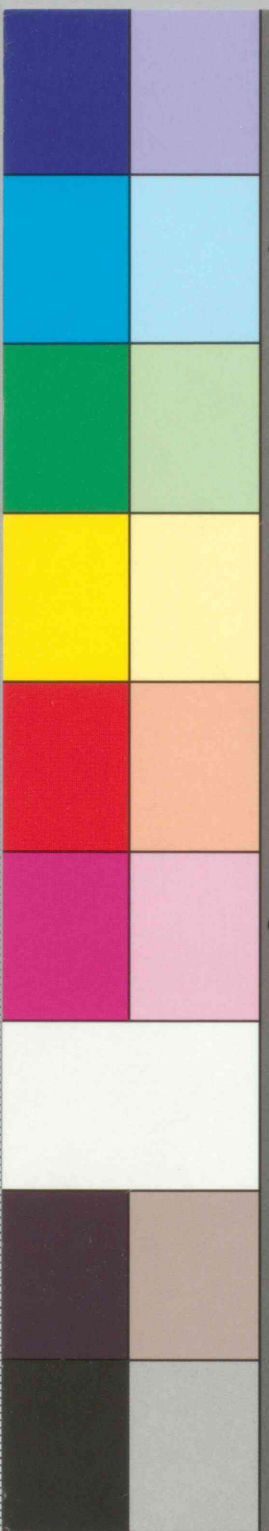
新国語 四年 下

文部省検定済教科書



教科
34
013

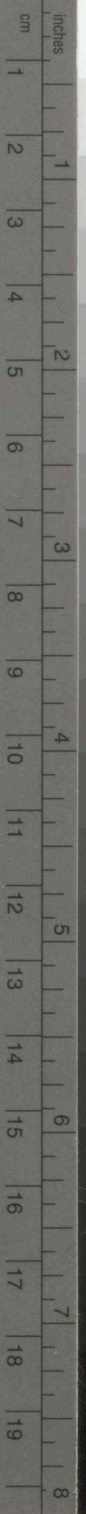
KC
Mi65



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

60144

教科書文庫

6
810
34-1950
0/304 499172



教科書文庫
6
810
34-1950
0130449972

昭和二十五年八月十二日
文部省検定済
小学校国語科用

足あと

広島大学図書
0130449972



新国語 四年下

中央図書館

指導者のために

- (一) この本は、商工業と人間の生活に取材し、生産と消費に対する基礎的な理解とその文化的な生活に対する関心を助長しながら、身心の発達に即して国語学習における諸作業を自発的創造的に導くように組織し編集してある。特に言語活動を中心に理解と表現の学習が興味のうちには有機的発展的に行われるように努めた。
 - (二) この本の内容は、次の三つの題目に分かれている。
 - 一 冬の顔
 - 多の自然と商工業を主題として、詩・生活文・伝記などを提出し、商工業に対する基礎的な理解を養いながら、言語生活の分野を拡げることとする。
 - 二 図書室
 - 図書室の経営と利用を主題として生活文・物語などを提出し、図書に対する理解を深めると共に、学年末を
 - 三 少年の日
 - ひかえての国語学習の総合的作業を導入しながら、言語教養を深めることとする。
 - 空的存在としての人間生活の基本的諸相に取材を展開して、物語・伝記などを提出し、生活態度に対する思考を高めながら、言語教養を中心に新学年を迎える心構えを整えることとする。
 - (三) この本に、提出した新出語は二四二語で、毎ページの新語率は二・八八語である。学習の仕方・新語表・新字表を掲げて使用上の便を図ると共に、文章は敬体口語を主としながら次第に常体口語にも慣れさせるように留意した。
 - (四) この本のさしえは、学習上重要な位置を占めるので特別な考慮が払われている。
 - (五) この本の使用期間は、だいたい一月から三月までを目標として、大題目を平均一か月あてとしたが、それを固執する必要はない。地方の実情と児童の個人差を考慮して有効に活用されたい。
- (右は本書編集の概要である。詳細は新国語指導書を参照されたい。)

広島大学図書
0130449972



もくろく

一 冬の顔 4

(一) 冬の顔

(二) 朝の市

(三) 無言のあいさつ

二 図書室 28

(一) 辞書

(二) 図書室

(三) 足あと

三 少年の日 56

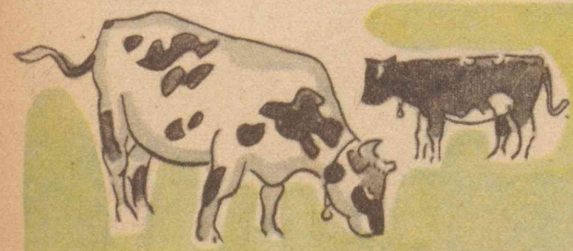
(一) 屋根うらのオルガン

(二) 共に働く

(三) アルプスの牧童

学習の仕方
新しいことば
かん字表

85





冬のいちよりの木は、大きな庭ぼうきみた
いだ。空の雲をはいておくれ。
しもばしらのたっている畑で、春のゆめを
みている麦の芽。
ノートの上に、ふわりとまいおりてきた雪。
レンズをさがしているうちに、小さな水の
しみになってしまった。



一 冬の顔

(一) 冬の顔

つららに朝日がはねかえっている。まどか
らピアノの音がころげてくる。

寒い朝。湯をのむと、湯気がほおをはって
のぼる。

雪をはらい落して、竹がせのびをした。

スキーはたのしい。どこでもみんな道になるんだから。

小さな子どもが、坂道ですべって遊んでいる、雪まみれになって。——白い子ぐまさん。

焼きいもを買った。紙ぶくろをだいて帰ると、むねまでほかほかあたたかい。

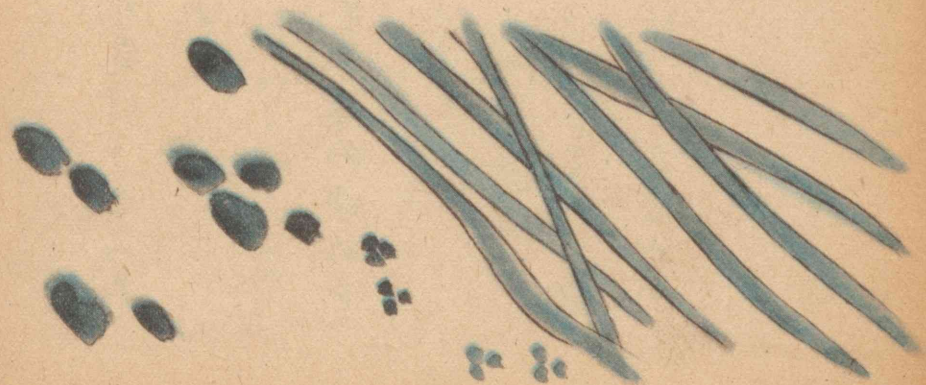
みんな帰った運動場、夕日で雪がばら色に光っている。なんとまあ、たくさんの足あと。

おかのつばきの林でだれかが歌っている。白い月が、おきの島の上にのぼった。

夕ぐれの間、炭焼きのけむりが風になびいている。

自動車が走って来る。ヘッドライトにおどる雪の小人たち。

月夜の雪道は青いな。



(三) 朝の市

日曜日の朝でした。

よしこは、おかあさんといっしょに朝の市にいきました。

近くの村の人たちが、大通りの両側に野菜をならべて売っていました。

町の人たちがたくさん買いだしにきて、朝の市は、いつものようににぎわっていました。

まっ白な雪の上に、いきいきとした野菜を美しくならべて



いました。白菜だけを売っている人もありました。だいこん・にんじん・ごぼうなどをならべて売っている人もありました。ほうれんそう・きゃべつ・ねぎ・れんこん・じゃがいもなど、なんでもありました。

「今ごろまで、よく、こんなにいきいきととっておかれるものですね。」

と、よしこがいますと、

「貯蔵法がいいからですよ。」

と、おかあさんがおっしゃいました。

「どんなにして貯蔵するの。」

「野菜の中には、寒さに強いのもあれば、弱いのもあるし、



長もちするのもあれば、くさりやすいのもあるでしょう。ですから、野菜によって、それぞれ、貯蔵法がちがうわけです。」

ほうれんそうなどは寒さに強い方だし、だいこんなどは大きなからだをしているくせに、弱い方だということでした。ねぎなどはこおっても、土にいけておけば生きかえって芽を出すという話でした。

また、土の中に育ったもの、たと

えば、ごぼう・にんじん・やまいもなどは、かわいた土をかぶせておくと、長もちするということも教えてくれました。

「おかあさん、あの白菜はどうでしょう。」

「でも、少し、ねだんが高いようね。」

ふたりは、あちこち見てまわりました。

つけものを売っている人もありました。りんご・なし・みかん・かき・くりなどのくだもの売っている人もありました。りんごのはこには、もみながらつめてありました。

「あれも、こおらせないためかしら。」

と、よしこがいうと、

「そうよ。それに、ああしておくといたまないのでね。」

ど、おかあさんがおっしやいました。

手かご・ざる・手おけ・ほうき・わらぞうりなども売っていました。冬の間、村の人たちはこんな物も作っているということでした。

見て歩いているうちに、安くていい白菜がみつかりました。きやべつやにんじんも買いました。

昼すぎ、よしこはお使いにいきました。

大通りを通っていくと、にぎやかだった朝の市は、すっかり終わっていました。まだ品物を売りきっていない人たちが、ちらほらしているだけでした。

けさ、野菜を売っていた人たちが、魚を買って帰るのをみかけました。雑貨屋で、日用品を買っている人もありました。反物屋は、どの店にもぎわっていました。かざりまどをのぞいている人もあれば、赤いきれや小さなたびなどを見せあいながら、店を出て来る人にも会いました。

「村の人たちは、畑にできたものを町に持ってきて売り、村にないものを買って帰るのだな。」

ど、よしこは思いながら歩いていきました。



(三) 無言のあいさつ

店先に織物の品があふれ、日本の織物業が世界的な発展をとげたのは、自動織機を発明した豊田佐吉のおかげである。

佐吉が老年になってから、これまでの発明を助け、事業に協力してくれた人々を、東京に招いて謝恩の会をもよおしたことがあった。

その時、あいさつのために立ちあがったかれは、いつまでたっても何もいわなかった。見ると、あいさつをしようとしても、ことばが出ないらしく、口びるをふるわせているだけ

で、目にはなみだを光らせていた。

「わかりました。もう、いいからすわってください。」

友だちが、やさしくかれのかたをだいて席につかせた。

水をうったように、静かにこのありさまを見ていた人々も、かれの心を思いやって、そつとなみだをふいた。

この無言のあいさつの中には、次のような苦心の一生が物語られていたのであった。

佐吉は、小さい時から、機械を見たり、いじったりすることが好きであった。

今から八十年も前の、しかも、さびしいなかのこととて、



機械といつても、そまつな手織りの
機はたぐらいのものしかなかった。

母が、ばったん、ごつとんと動か
している機を、佐吉は一日じゅうな
がめて楽しんでいた。

「変わった子だなあ、男のくせに。」
近所の人までが、そういうほど、
機のそばからはなれずに、いつまで
も見ていたのだった。

見ているだけではがまんができな
かったとみえて、じぶんで機を動か

してみるような時もあった。

ある日、母がいどばたでせんたくをしていると、家の中で、
あたりをはばかりのように、とん、ぱたんと機を動かす音がし
た。だれだろうと思つてのぞいてみると佐吉であった。

「まあ。」

母はあきれて、佐吉をしかろうと思つたが、あまりにもま
じめな顔をしているので、しばらくだまつていた。すると、
佐吉の方で母をみつめて、きまりわるそうに機をおりた。

両親は、かれが田畑で働くよりも機械いじりのすきなこと
を思つて、大工の仕事を習わせることにした。かれが十才の
ころであつた。

たいへんまじめで、もの覚えもよく、その上に、生まれつききょうであったとみえて、人よりもはやく一人前の仕事ができるようになった。

しかし、大工としてたどうというようすもなく、やはり、機のことに関心がかかれているとみえて、ひまがあると機ばかりいじっていた。父は、それをにがにがしく思って、なんとも思いとどまらせようとしたが、父の目をぬすんでは、こつこつと研究を続けていた。

どうすれば、もつと速く、むらのない織物を織ることができるか、かれはそのことばかり思いめぐらしていた。

しまいには、村人までが、

「機織りの気ちがい。」

とあって、かれをあざけるようにさえなった。

しかし、かげになり、日なたになって、かれの研究をはげましてくれた人がひとりいた。それは、母であった。

明治二十三年、上野公園に博らん会があった。

その機械館には、各国の進歩したいろいろな機械がならべられてあった。その機械の前に、朝からすわりこんで熱心に見入っていた青年が、

「これだっ。」

とさげんで、番をしている人をびつくりさせた。

その青年こそ、豊田佐吉であつた。

「あの歯車が動く、このてこがあがる。このてこがあがる、あのしんぼうをおさえる……なるほど、よくできてゐる。うまくつながりあつて……うむ、まったく生きものだ。」
かれはひどく感心しながら、機械のこまごまとした所をのぞきこんだり、しきりに手帳に書きこんだり、じつと小首をかたむけて考えこんだりした。

毎日やってきては、機械の前にすわりこんでゐるので、番をしてゐる人はあやしんだほどであつた。

試運転をしてみせる時になると、かれは、いつも最前列にすわりこんで、目をさらのようにして見ていた。

それらの機械は、かれが思つてゐたよりはるかに大じかけで、複雑なものであつた。感心して見入つてゐるうちに、かれは、じぶんの研究が余りにも貧弱なのに気づいて悲しくなつてきた。また、日本製の機械が、そこに一台もないということとはたまらなくさびしいことにも思われた。

「これではいけない。」

かれは、心の中でさげんだ。

家に帰つて来ると、かれは前にもまして、機の改良にむちゆうになつた。

しかし、かれの作りあげたものはことごとく失敗であつた。失敗に失敗を重ねたかれは、作りかけの機械をたたきこわ

してしまおうかとさえ思
ったこともあったが、思
いなおしては、血のにじ
むような苦心を続けた。

明治二十三年の秋のく
れである。とうとう、か
れは木製の人力織機の発
明に成功することができた。

試運転の日、機台に立って、これを運転してみせたのは佐
吉の母であった。

たて糸と横糸がしつくりと組み合って、軽快な音をたてな
がら織りだされていく布を見て、人々はおどろいてしまった。

「もう、いいですよ、おかあさん。」

佐吉に手をとられて、機台からおりた母は、かれのむねに
顔をおしあててむせびないた。

しかし、これくらいの成功に満足している佐吉ではなかつ
た。ただちに次の発明にとりかかった。

人力織機を動力織機にきりかえようといっているのである。再び、
血の出るような苦心の日がくりかえされた。

時には、研究費はいうまでもなく、あすの米にもこまるよ
うな日もあった。が、かれは希望をひるがえすようなことは



なかつた。齒をくいしばって研究を続けた。

そして、明治二十九年には木製ながらも動力織機の発明に成功することができた。しかし、改良する点が数々あつたので、部分部分に対して、さらに研究を進めていった。

その間に、かれの発明によつて、日本の織物業はみちがえるように発展していった。

明治三十二年には、自動的にたて糸をくり出すしかけを発明して、日本とスイス政府の特許を得た。それまでは、たて糸が切れると、機械の運転を止めてつなぎ合わせなければならなかつたが、この発明によつて、運転を続けながら糸をつなぐことに成功したのである。これこそ、かれが、世界的発

明にふみだした第一歩であつた。

織物の大会社を起して事業の発展を図りながら、佐吉は、なおも研究をおこたらなかつた。

明治三十五年には、ついに、日本で初めての自動織機を作製して特許を得た。そして、これまでの織物業を一変させることになつた。研究にあきること知らないかれは、さらにそれにも改良を加え、明治四十一年には、外国で最も進歩している織機と比べて、豊田式自動織機がはるかにすぐれているところまでこぎつけた。

その後、かれは、アメリカやイギリスの織物工業を視察して、発明に対する自信をいっそう深め、ますます研究をおこ



「きょうは、元日でございますよ。」
といわれて、
「あ、そうだったのか。」

たらなかった。
ある時など、ゆうべからねずに研究を続けていたとみえて、目を赤くしながら、研究室を飛びだしてきた。
そして、
「おうい。だれかいなか。」
といって、工場にかけこんでいった。
気づかって、そこへきた夫人に、

と、手にした設計図を残念そうにみつめていた。
研究のためには、正月も何も、かれにはなかつた。
こうして完成された豊田式自動織機は、女工ひとりおれば、五十余台が、すばらしい速度で自動的に綿布を織り出すまで発展し、遠くヨーロッパ各地にまで売りひろめられていったのである。二十四オで木製人力織機を發明してから、六十四オでこの世を去るまで、一つの機械と取り組んで、特許を得たものだけでも八十余におよんでいる。

謝恩の会で、かれのした無言のあいさつの中には、これまでの思い出が、いっばいにこもっていたのである。

二 図書室

(一) 辞書

図書室で、みんなが本を読んでいると、

「みなさん、ちよつと、ここにきてごらん。」

と、先生がおっしゃった。

先生のそばには、みどりが、読みかけの本を持って立っていた。先生が、その本を受けとって、

「みどりさんが、この字が読めないといってききにきたのですが、だれか読めますか。」

といって、その字をさされた。

そこには、「正確」と書かれてあった。

まさおは、すぐ、

「せいかくと読みます。」

と答えると、先生は、

「そうです。よく読めますね。ところで、もし、この字の読み方が、だれにもわからなかったとしたら、どうしますか。」

どうして調べますか。」

とおっしゃった。

ひさしが、

「先生、ぼく、調べ方を知っています。」

といって、本だなから、部厚い本を持ちだしてきた。



先生はにこにこして、だまつて見ていられた。

ひさしは、「正」という字の筆順をたどっていたが、

「五画だな。」

と、そのページを開いた。

「正」という字をみつけると、また、ぱらぱらとページをめくっていたが、しばらくして、

「ありました、ほら、ここに。」

と、そこをさした。

「正確」と漢字で書いてある下に、かなで読み方が示してあり、意味も書いてあった。

「よく知っているなあ。」

と、みんなは感心した。

「ぼく、にいさんに教えてもらったのさ。この厚い本のことを、辞典というんだよ。」

と、ひさしがいうと、先生は、

「そうだ。辞典といいます。辞典のことは、また、辞書ともいいます。」

と、辞書について、お話をしてくださった。

「国語の辞書は、大きく、二とおりに分けることができます。」

からですよ。」

と、先生がおっしゃった。そして、

「辞書には、まだ、ほかにいろいろあります。今お話した、二とおりのものをいっしょにしたような便利なものもできているし、くわしく調べるときに使うものもあれば、外国語までわかるようになっていいるものもあります。みな、学者が苦心をして作られたものです。」

と、教えてくださった。

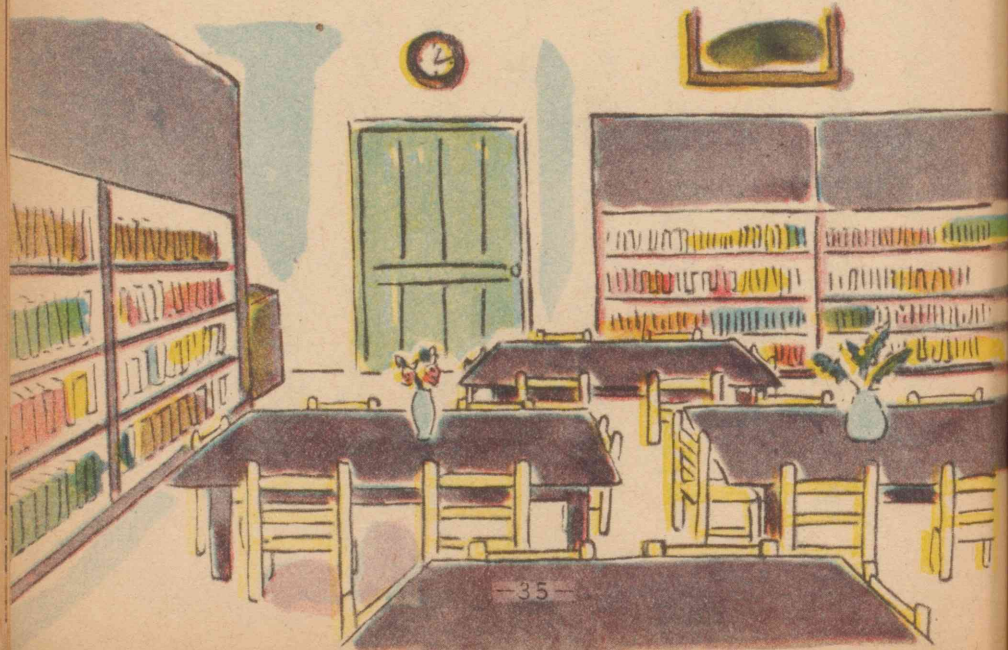
それから、みんなが辞書を使って、いろいろなことばをひいてみた。そして、これからは辞書を使って、正しく読んだり、書いたりして、いこうと話した。

(二) 図書室

三学期になってから、ぼくは図書委員に選ばれて、図書室のせわをしています。

図書室をつくらうという計画は、だいぶ前から、全校自治会の話しあいの的となっていました。

それが、去年の秋の読書週間（十月二十七日から二週間）に、やっと



できあがったのです。

ぼくたちは、その前から学級文庫をつくっていました。しかし、学級文庫だけでは、本の数が少いので学習に不便ですし、読んでしまうと、そのあとがなかなか続きません。

それで、学校じゅうの友だちが、みんなで利用ができるようにしたいというので、いろいろ話しあいをし、おたがいに本をもちよつてできあがったのが、この図書室です。

図書室に備えつけてある記録を見ますと、初めのころは、全部で四百十三さつとなっています。その後、きふしてくれる人があつたり、P・T・Aのおせわで手に入れることができたりして、今では七百八十六さつになりました。色とりど

りの本が、書だなにたくさんならんでいます。

しかし、これだけでは、まだまだ足りないそうです。図書係の先生は、

「少くとも、生徒ひとりあたり二さつ以上は備えつけておきたいものだ。」

とおっしゃいます。

今の図書室の本の数では、全校の生徒数を七百五十名として、ひとりあたり一さつとちよつとにじかならないわけです。みんなで力を合わせて、もっとたくさん集めるように努力しなければならぬと思います。

こんど卒業する六年生の人たちが、記念として、たくさん

の本をきふしてくださるそうですから、だんだんよくなっていくでしょう。図書室に本がふえてくるのは、ほんとうに楽しみです。

本は、辞書・国語・社会・理科・雑と、大きく五つに分けてあります。ならべる書だも別にしてあります。本のならば方については、たとえば、理科のうちでも、動物に關したものとか、植物に關したものとかが、それぞれにまとめたりして、細かくふうしてならべてあります。

本には、みな、番号がはりつけてあります。番号も、数字によつて本の種類がわかるようにくふうしてあります。一番初めの数字が1になつてゐるのは辞書類、2になつてゐるの

が国語類というようになっています。また、辞書にも、漢和辞典や国語辞典のほか、百科辞典をはじめ、いろいろな辞書があるわけですから、二番目の数字で、その種類がわかるようにしてあるのです。

ぼくは、この番号を帳面と照らし合わせて、きちんと整理しておく係です。係になつてみて、番号のつけ方がどんなになつてゐるか、それが、本を整理するのにどんなに便利なものであるか、よくわかりました。



整理係の仕事は、やさしいようにみえますが、なかなかめんどうなものです。ことに、このごろのように貸し出しをするようになってからは、ほねがおれます。

初めのうちは、本の数が足りないので貸し出しはしませんでした。けれども、本の数がふえ、利用する人が多くなってきましたと、読む場所がせまい上に、読む時間もまちまちなりますので、三学期になってから貸し出しを始めたのです。

貸し出しは、ひとり一さつ、三日以内ということにしてあります。貸し出し票に、学年・組・氏名・書名・番号・期日を書いて係に出し、本を借りていくのです。貸し出しを始めてから、図書室の本を利用する人がたくさんふえました。

ぼくたちは、ときどき図書委員会を開いて、図書室をよくすることに話しあいをしています。

貸し出しを始めることにしたのも、委員会で話しあいをして決めたのです。

この前の委員会で、ぼくは、「本を利用する人の意見をきくために、投書ばこを作ったらどうでしょう。」

というと、みんなが賛成してくれました。

投書ばこを備えつけると、さっそく、「理科の本をもつと買ってほしい。」とか、「発明物語は理科の部に入れたらどうか。」などという意見が出てきました。

「黒板を備えつけて、新しい本をしようかいいしてほしい。」
という投書があったので、先生にお願いして備えつけていた
だきました。新しい本がくると、「書名・著者・だいたいの内
容・読むのに適当な学年・整理番号などを書きだしておくこ
とにしました。」

ぼくは、図書委員になってから、書物の広告などにも注意
するようになりました。本屋に行くことも、いつそう楽しみ
になってきました。

上級生が学校博物館の基をつくりましたが、ぼくたちも、
この図書室をりっぱにきずきあげていくために、努力を続け
ています。

(三) 足あと

よしこは、図書室のたなをながめながら、

「こんなにたくさんある本も、みな、一さつ、一さつ、だれ
かがお書きになったのだ。じぶんも、いつかは、こんな本
を書いてみたいものだ。」

と思いました。

学校から帰る道で、ふと、

「そうだ。今まで、じぶんで書いたり、調べたりしたものを
集めて、一さつの本にまとめてみよう。」

と思いつきました。

家に帰ると、さっそく、一年間に書いた作文や図画を出してみました。社会科や理科で調べたものも出してみました。

今からみると、四年になったばかりのころの作品などは、はずかしいようなものもありましたが、それにはそれなりに、また、なつかしい思い出がこもっていました。

作文は、全部とじこむことにしました。

口絵にする図画も選びました。

新聞やざっしを読んで、ためになると思って切りぬいておいた記事も、いっしょにとじこむことにしました。

一年間に読んだ、おもな本の名や、心をうたれた本の感想

なども書きそえておこうと思いました。

本にする材料を集めてから、どれを前の方に、どれをあとの方にとじこんだらよいか、いろいろ考えてみました。いつか、かべ新聞を編集したときのように、本を作るにもくふうがいると思いました。

おかあさんが、

「いいことを思いつきましたね。あなたの写真もはっておいたらどう。」

とおっしゃいました。

「そうでしたね。」

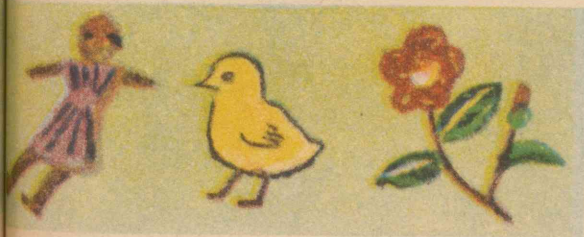
よしこは、この秋、おじさんに写していただいたのをのせ

ることになりました。

糸でどじたり、表紙の厚紙に色をぬったりして、きれいな本を作りました。

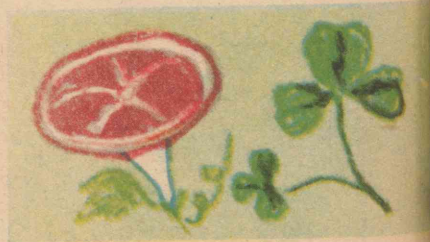
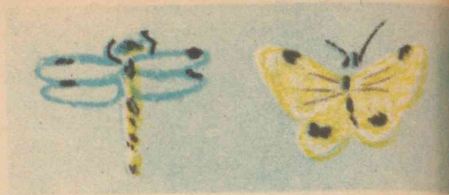
もくろく

まえがき	1
写真 (家の前で)	3
口絵 (川のけしき・ダリヤ)	5
作文のページ	9
私の研究	37
社会科で調べたこと	



理科で調べたこと

日記の中から (おもなできごと)	52
きりぬき帳から	64
読んだ本	70
あとがき	98



まえがき

ここに集めたものを見ると、今まで、じぶんの歩いてきた「足あと」をふりかえってみるような気持ちがあります。本の名を「足あと」としたのもそのためです。

作品のよしあしは別として、私にとっては、みな、いっし

ようけんめいに書いたり、調べたりしたものです。

中には、少し、よたよたと歩いたらしい「足あと」もあり、まっすぐに、元気に歩いたと思われる「足あと」もありますが、みななつかしいものばかりです。

この本のほかに、やはり、私の「足あと」として日記があります。日記を読み返してみると、そのころのことが、えい画のように思いだされて、これこそ、じぶんの「足あと」だと思ひました。日記は、べつにたいせつにとっておくことにして、この本には、おもなことだけを書きぬきました。

私は、今も歩いていきます。この本を作るといふことも、また、ひとつの歩みです。「足あと」は、これから後もながく続くのです。

春がきたら五年になります。ますます、しっかりとした「足あと」を残していこうと思います。

読んだ本

良寛^{りょうかん}さんのことを書いた本を読んで、良寛さんの正直な人からに心をうたれた。

生まれつき、人のことを疑うことのできなかつた人のように思った。

良寛さんが子どものころ、おとうさんにしかられて、うわ目を使っておとうさんを見たというので、

「そんな目をする、かれいになるぞ。」
といわれた。

夕方になって、良寛さんのすがたが見えないので、家じゅう大さわぎになった。

暗くなって、海べにぼんやりと立っている良寛さんを見つけた人が、

「ぼっちゃん、ここにおいでになりましたか。」

と、喜んで近づいていくと、良寛さんは悲しい声で、

「わたしは、まだ、かれいになっていないか。」
と、たずねたそうである。

良寛さんは、その後、おぼろさんになって、学問をし、修

業をつまれてから、山の中に住んでいられた。

たいへん子どもがすきで、里におりてきては、子どもを相手に遊んだ。

そのころの話。——かくれんぼをしていた子どもたちが、そっと帰ってしまった。それを知らない良寛さんは、小屋のわらの中に首をつっこんで、いつまでもかくれていた。

月が出て 夜ふけになった。

そこへきた人が、それをみつけて、



「良寛さん、どうなさったのですか。」

とたずねると、良寛さんは、

「しっ、大きな声を出すど、おににみつかる。」
といったということである。

良寛さんは、日本でも、指折りの字の名人といわれている
そうだが、たいへん質素な生活で、一生を送ったということ
である。

私は、良寛さんが大すきだ。

グリムの童話をたくさん読んだ。

私は、グリム兄弟は、童話だけを書いていた人たちかと思

っていたら、世界的に有名な学者であったそうだ。

ことに、兄のヤーコプ・グリムは、ことばの学者として名
高く、また、歴史のことも深く研究していた人らしい。

そのころ、ドイツに、歴史の学者の会があつて、グリムは
その会長になっていたということである。

その会で、学者たちが、グリムのたてた、学問上のでがら
をほめたたえた時、年とつたグリムは立って、

「ありがとうございます。最後に、一つ、お願いしておきたいことがあ
ります。私の死んだあとで、私のでがらなどについてはな
にもいっていただかなくてもいいですが、もし、なにかい
っていただけるなら、

『グリムは、祖国よりも愛したものをもたなかった男だ。』
とだけいってください。」

といって、たおれかかったので、友人にたすけられて席についたということである。

そんなに学問が深く、国を愛していた人だということがわかって、グリムの童話がいつそう親しいものになった。

あとがき

この本の編集を終って、なにか、ものたりない感じがしました。

よく考えてみると、私の歌った声や、よくできたといつて

ほめられたしばいの動作や、運動会で一等をとった速さを、そのまま残すことができなかつたからでした。

しかし、それは、私のからだや心の中にとけこんでいるのですから、いつか、また思いだして、その時のことを書いておこうと思ひなりました。

文字や絵に書いたものだけが、この本となったのですが、やはり、私の歩いた足あと^ははしっかりとついています。

そのうち、一年から三年までの作品を集めて、記念の本を作っておこうと思います。

一年の初めと終りでも、こんなにちがうのですから、大きくなってこの本を見たら、どんな気持がするでしょう。

三 少年の日

(一) 屋根うらのオルガン

ドイツの生んだ大作曲家、ヘンデルが、まだ、五つか六つになったばかりの時の話です。

ある夜のことでした。

使われている女が、おかあさんのへやにあわただしくかけこんできました。

「おくさま、ぼっちゃんが見えません。」
「ぼうやが。」

おかあさんはびっくりしました。

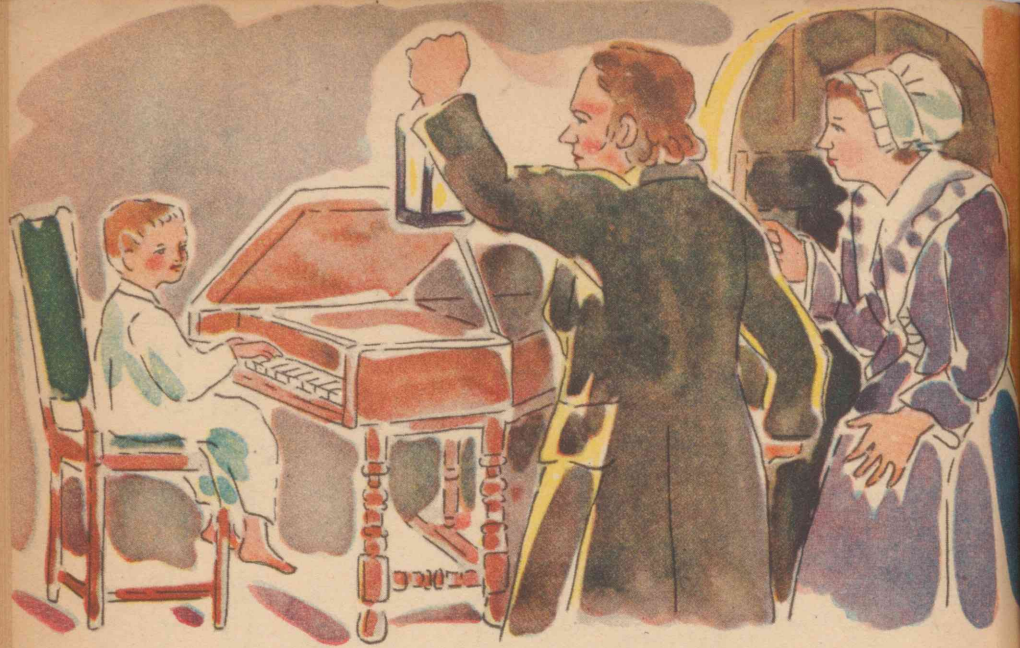
急いで、ヘンデルのへやにかけていってみました。もう、どつくにねたはずのヘンデルがいません。

「ぼうや、ぼうや。」

おかあさんは心配でたまりません。なんどもよんでみましたが、あたりは、しんと静まりかえっています。

「なに、ぼっちゃんがない。それはたいへんだ。」

ヘンデルの家に使われている人たちが集まってきました。みんな得手分けをしてさがしました。へやというへやをさがしました。庭もさがしました。近所の家にもいって見ました。近くの原っぱにもいって見ました。



「さがせ、さがせ。—こら、なにを
ぼんやりしているのだ。」
みんなをしっかりとつけ、じぶんも、
そこらじゅうをさがしまわりました。
みんなも、おどおどしながら、もう
一ど、家の中をさがしまわりました。
外はたいへんな風で、まどががた
がたなっていました。
どこをさがしても、ヘンデルはい
ません。
「こまったなあ。」



けれども、ヘンデルはどこにもいません。
「ああ、どうしましょう。」
おかあさんは、顔をまっさおにしてしまいました。
そこへ医者をしているおとうさんが帰ってきました。こ
のさわぎをみて、
「どうしたのだ。」
とたずねました。
みんなは、口々に、ヘンデルのいなくなったことを告げま
した。
「なに、ぼうやがない。」
おとうさんもあわてました。

みんなはがっかりしてしまいました。

その時、風の音にまじって、どこからともなく、オルガンの音が聞えてきたような気がしました。

「おや。」

おとうさんはたちどまりました。

「みんな、静かにして。」

おとうさんの声に、みんなは耳をすましました。

「はてな、屋根うらしいぞ、あの音は。―おい、だれか、ランプを持ってきて。」

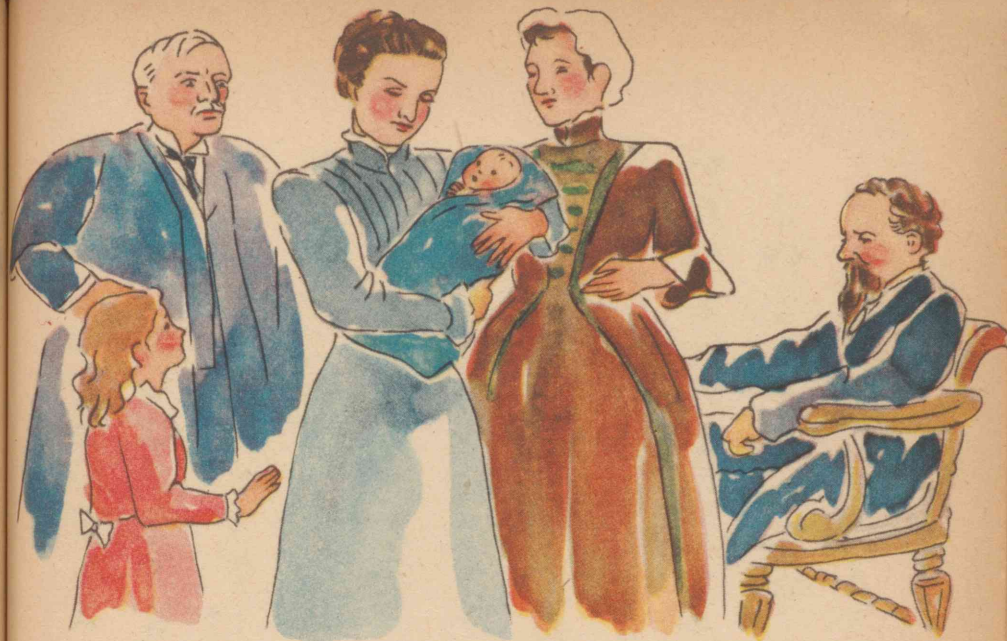
おとうさんはランプを手にとると、階だんを上っていきました。おかあさんも上っていきました。オルガンの音が、だ

んだん、はつきりとしてきました。

おとうさんは、そっと、屋根うらのへやの戸をあけてみました。すると、どうでしょう。うす暗いランプの下で、白いねまきのままのヘンデルが、むちゅうで、オルガンをひいているではありませんか。

だれからも手ほどきされたことのないヘンデルが、自作の曲をひいていたのでした。屋根うらのへやで、ほのかなランプに照らされながら、オルガンに向かっているヘンデルのすがたは天使のようでした。

このことがあってから、音楽のきれいなおとうさんも、ヘンデルの天才を認めることになったということです。



(二) 共に働く

「女も男と同じように、社会にたつて共に働こう。」という考え方がアメリカに起つてきたころ、まっ先に立つて、そのために努力した婦人の中に、エリザベス・スタントンという人がいました。

このエリザベスが、四つになつた時のことです。

妹が生まれて、初めてねえさんになつたといふので、エリザベスはたいへん喜んでいました。

あかちゃんは、まるまると肥えて、ぱっちりとした目をしていました。エリザベスは、たまらなくかわいいと思ひました。

ところが、お祝いにきた人の中で、

「おや、女の子ですって。それは残念でしたね。」と、小声でささやいた人がいました。

エリザベスは、そのことを聞きつけて、それはどういふことだらうと思ひました。

「おかあさんも、ねえさんも、じぶんも女ではないか。あん

なにかわいいあかちゃんが生まれたのに、なぜ、残念なの
だろう。」

と、ふしぎに思いました。

しかし、それは、ごく小さい時に、ちらっと思っただけの
ことですから、すっかりわすれていました。

エリザベスには、ねえさんのほかに、いさんがいました。
いさんは、きょうだいの中でただひとりの子でした。

エリザベスが学校に通うようになってからのこと、そのに
いさんは病気になって、なくなっていました。

家族の者たちは、深い悲しみにとざされました。ただひと
りの男の子であっただけに、おとうさんの悲しみはとくに深
かったようです。

日数がたつて、家の中に、ときどきわらい声が出るように
なつても、おとうさんだけは、いつもふさぎこんでいました。
エリザベスは悲しくなつて、おとうさんにだきついていい
ました。

「ね、おとうさん、そんなに悲しまないでください。わたし
たち、にいさんの代わりになつてあげます。」

おとうさんは、かしこそうなエリザベスの顔を見て、ちょ
つとほおえみをうかべながら、

「ありがとう。」

と、いつて、頭をなでてくれました。そして、

「おまえが、もし、男の子であってくれたらなあ。」
と、ひとりごとをもらしました。

「なつてあげますよ、おとうさん。にいさんと同じようになつてあげますよ。」

エリザベスは、まじめな顔をしていました。

それから、エリザベスは、どうしたらにいさんと同じようになれるかしらと、思いめぐらしました。

にいさんは、乗馬のけいこをしていました。むずかしいギリシア語も習っていました。そのほかは、じぶんたちとそんなに変わっていないように思いました。

そこで、エリザベスは、にいさんが練習していた馬をひき

だして、乗馬の練習を始めました。ギリシア語も習うことにしました。

「おとうさん、にいさんのように馬に乗ることができるようになりましたよ。ギリシア語も少しわかってきました。」
と、エリザベスがいました。

おとうさんは、だまつてわらっていました。

にいさんは、学校の成績がよかったので、エリザベスもよく勉強をすることにしました。みちがえるように、勉強をする子どもになったので、先生からも、たいへんほめられました。

りっぱな成績を示したというので、学校から、賞品をもら

った時のことでした。

「こんどこそ、にいさんと同じだといって、おとうさんに喜んでいただけるとはちがいない。」

と思つて、急いで帰つてきました。

そして、おとうさんに賞品を見せました。

「おお、よかつたね。」

おとうさんは喜んでくれましたが、そのあとで、

「ほんとに、おまえ、男の子であつてくれればよかつたのに。」と、わらいながらいいました。

エリザベスは、がっかりしてしまいました。

「なぜ、男の子に生まれるのがいいのだろう。」

その時、エリザベスは、心の底からそれを疑問に思いました。そして、妹が生まれたとき、

「女の子ですつて、それは残念でしたね。」

とささやいた、あのことをばを思ひだしたのでした。

「なぜ、女に生まれたことが残念なことでしょう。」

エリザベスは、おかあさんにおたずねしてみました。

「いいえ、そんなこと、ちつとも気にすることはありませんよ。心配しないで、しっかりと勉強なさいね。」

おかあさんはわらいながら、やさしくいつてくれました。

が、そのわらいには、なんとなくさびしさがただよっているように思いました。感じやすいエリザベスには、それがよく

わかりました。

そのころ、エリザベスは学校の帰りに、裁判所のおとうさんのへやに遊びに寄ることがありました。おとうさんは、裁判官をしていました。

そのへやには、おとうさんの仕事の手助けをしている、ひとりの書記がいました。

この人なら、なんでも教えてくれるように思いました。

「どうして、女に生まれたことが残念なことなのでしょう。」
エリザベスは、疑問に思ったわけをくわしく話してたずねてみました。

書記はわらって、

「さあ、そのうち、わかるときがくるでしょう。」

といって、相手になってくれませんでした。

それでも、エリザベスがなんどもたずねるものですから、書記は、たなから厚い本を取り出してきて、ページを開いて読んでくれました。

「ここに、こう、書いてあるでしょう。——気ちがいと女を除いた、すべてのアメリカ人が、政治にかかわることができ
る。——とね。」

「これはなんですか。」

「法律です。」

「法律って、なあに。」

「国の規則のことですよ。」

書記は、ページをあちこちめくって、「氣ちがいや女と書いてあるところを見せてくれました。

エリザベスには、それがどんなことなのか、よくはわかりませんでした。が、「氣ちがいや女」ということには、子どもながらにも、はらがたつてたまりませんでした。

「だれが、あんな、かつてなことを決めたのだらう。きっと、男が決めたにちがいない。おとうさんたちがつくったのか



もしれない。いつか、あそこのページを破ってやろう。」

単純にも、エリザベスは心の中でそう決心しました。

それからというもの、エリザベスはおとうさんのへやに寄るごとに、人のいない時を見ては法律の本を引きだしました。そして、「氣ちがいや女」と書いてあるところをみつけだしては、そのページを折っておきました。

おとうさんが、旅行にでもいかれて、るすになった時をみはからって、そこを破ってしまおうという計画でした。

しかし、そのかわいい計画は、すぐ、おとうさんにみつかったてしまいました。

「どうしたの、こんなにページを折ったりして。」

「……………」。

エリザベスは、耳までまっかにしてだまっていた。「どんなことでもいいから、お話をしてごらん。」

おとうさんにやさしくいわれて、エリザベスは正直に、じぶんの計画をしていたことを話しました。

おとうさんはわらって、

「おまえの気持はよくわかる。しかし、この本は破っても、ほかに、いくらでも同じ本があるのだ。もし、この中に書いてあることばの中に、気にいらなところがあるならば、おまえが大きくなってから、みんなに働きかけて法律をかえるようにすることだね。」

と、やさしく頭をなでてくれました。

エリザベスは、おとうさんに対してすまないと思いました。しかし、そういう法律が現在あることを、心から悲しく思いました。

いつのまにか、こんなことのあることもわすれて、エリザベスは明かるく育ちました。が、小さい時に、心に深くきざまれたことは、おとなになっても、また、頭をもたげることがあるものです。

「気ちがいや女」という文章の中から、「女」という文字を除き、女も男と同じように教育を受け、共に社会に立って働く世の中を実現するために、エリザベスは努力をささげました。



(三) アルプスの牧童

まさおが、話しあいの話題として、ぎっしりに書いてあるお話を読みました。

みんなは、そのお話を聞いてから、じぶんの感じたことや考えたことを、自由に話しあおうというのでした。

五月になると、山国のスイスにも春がおとずれます。

そのころになると、いろいろな花が、一時にどつとさきだします。

花の下には、長い間、冷たい雪の下で春の来るのを待っていた草が、いつせいに芽をふきだします。雪どけの水で、水かさを増した小川の音があたりにひびき、小鳥が集まってきた、さかんにさえずります。

アルプスの放牧が始まるのはこのころです。

半年の間、小屋の中で冬の生活をした牛やひつじは、久しぶりに戸外に連れだされ、新しい空気にふれるのですが、かれらにとって何よりの喜びは、緑の草のごちそうです。

まず、牛たちは、低いところにある牧場に連れていかれま

すが、五月から六月、六月から七月と、太陽の光が強くなり、山の雪がとけるにつれて、だんだん高いところに移っていくのです。

夏のさかりの八月になると、海ばつ二千六七百メートル、富士山の七合目ぐらいの高原でくらすことになります。

かれらの、この高原の生活は、九月から十月にかけて終りを告げ、登ってきた道を逆に、同じように牧草を食べながら下り始め、十月末か十一月の初めには、また小屋に入れられて冬をむかえることになります。

この間、「アルプスの牧童」といわれる、十二三才の少年たちが、牛やひつじの群れの番をひきうけます。牧童たちは、犬

を連れて、口ぶえをふきながら番をします。

ある年の夏でした。

私は、ユリヤという高い山のとうげ道を、自動車でこえていったことがあります。

広い緑のけいしや面に、一かたまりの牛の群れが目にはいりました。

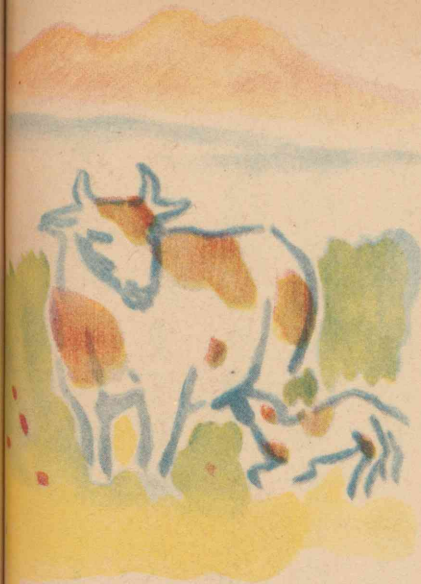
——これが、アルプスの放牧だな。

と、初めて見る光景に、私は自動車をおりて、牛の群れに近づいていってみました。

大きくて、毛なみもつやつやしたりっぱな牛の群れ、この牛の群れにみとれていると、



「さびしいもんですか。ごらんなきい。ここに、ぼくの、いい助手がいるでしょう。」
 といって、そばの番犬をさしました。
 「それに、この牛たちはいい友たちですし、あの山も、野原も、青空も、飛んでいる雲も、みんな友たちです。」
 といってわらいました。
 私は、
 「きみは、ここで、何か本でも読む



「こんにちは、ごきげんよう。」
 と、声をかけられました。
 みると、牧童が、日にやけた顔をにこにこさせて、草の上にしををろしていました。
 「いい天気だね。どこからきた牛だい。」
 と、話しかけてみました。

「シールスという、ここから十キロほどの村からきました。」
 「たったひとりで、さびしくはないかい。」
 牧童は、

の、それとも、詩でも作るのかね。」

というど、少年は大声でわらいながら、

「詩ですつて。ぼくには、とてもそんなこと——。ただ、こんな美しいけしきの中で、いろいろなことを考えることは大すぎです。ぼくは牛かいですからね。ちちしほりを習ったり、バターやチーズを作ることを覚えたり、それで、ぼくはくらししていこうというわけなんですからね。」

と答えました。そこで、

「学問をして、えらい人になりたいとは思わないかね。」
ときいてみると、

「えらい人ですつて。——ぼくは、チーズ作りになって、それ

で、いい人間になればいいと思っっていますよ。」

というのでした。

私は、そのはきはきした、明かるい態度が、すっかり気に入ってしまいました。ことに、牧童のいった、「いい人間」ということばをおもしろく思いました。

私が、まだ、小さかったころ、

「勉強して、えらい人になれ。」

と、教えられてきた、「えらい人」と思い合わせて考えさせられました。

スイスの人たちのものの考え方と、この少年のことばには、何かつながりがあるように思われました。

話題の中心は、すぐ、「いい人」と「えらい人」の問題になりました。いろいろな意見や感想がつきつきに出て、話しあいはいへんにぎわいました。

おしまいには、「ほんとうに『いい人なら』『えらい人で』、『えらい人なら』、また、『いい人』ではないか。と、いうような意見にまとまってきましたが、五年生になってから、もう一ど、話しあってみようということになりました。

まさおは、こんな話しあいをしながら、世のため、人のために働いた人たちのことを思いたすと、心の中に大きな望みがわいてくるような気がしました。

学 習 の 仕 方

一 冬の顔

ここには、おもに、どんなことが書かれてあるか、考えながら学習しましょう。

三つの文がどんなつながりをもっているか、書きぶりがどうちがうかなどを、考えながら学習しましょう。

あなたの町や村では、どんなにして品物のとりひきをしたり、工場で品物を作ったりしているかなどを調べながら、この文の学習をしましょう。

(一) 冬の顔

一つ一つの文がどんなありさまを歌ったものか、はつきりさせましょう。

一つ一つの文の、もの見方のおもしろさに

気をつけて学習しましょう。

一つ一つの文がどんな順序でなべられていくか気をつけてみましょう。

なぜ「冬の顔」としたか、そのわけを考えてみましょう。

あなたも、あなたの町や村の「冬の顔」を書いてみましょう。

(二) 朝の市

朝の市ではどんなものを売っているか、書きだしてみましょう。

冬の野菜はどんなにして貯蔵するか、書きだしてみましょう。

じょうずな買い方について話しあいましょう。もののねだんがどうして起るかについて話し

あいましょう。村と町とはどんなつながりをもっているか、書いてみましょう。

(三) 無言のあいさつ

まとめて話ができるようにしましょう。

佐吉が、自動織機を発明するまでの順序を書きだしてみましょう。

佐吉の人がらについて話しあいましょう。

佐吉のてがらについて話しあいましょう。

発明するには、どんな心がけがたいせつかについて話しあいましょう。

二 図書室

ここには、おもに、どんなことが書かれてあるか、考えながら学習しましょう。

三つの文が、どんなつながりをもっているか、書きぶりがどうちがうかなどを、考えながら学

習しましょう。

あなたも図書室・図書館・書物・辞書について考えたり、調べたりしながら学習しましょう。

(一) 辞書

辞書の必要なわけを考えながら読みましょう。考えたことを話しあいましょう。

辞書にはどんな種類があるか調べてみましょう。

あなたも辞書を使って正しく読んだり書いたりするようにしましょう。

一つの辞書でわからないときは、他の辞書もひくようにしましょう。

(二) 図書室

あなたの学校の図書室(図書館)とくらべながら学習しましょう。

書物の分け方について考えてみましょう。

図書室(図書館)をよくしていくにはどうしたらよいかについて話しあいましょう。

(三) 足あと

まとめていうと、どんなことを書いた文でしよう。

なぜ、この本を「足あと」としたか、そのわけを書いてみましょう。

あなたのもっている本と「足あと」をくらべてみましょう。

良寛さんの人がらについて話しあいましょう。クリムの人がらについて、思ったことを書いてみましょう。

「あとがき」について、気のついたことを話しあってみましょう。

「もくろく」にあつて、ここにのせてないものはどんなものなのか、そうぞうして話し合

つてみましょう。

あなたも、作品や調べたりしたものを集めて本にしてみましょう。

三 少年の日

だいまくを「少年の日」としたわけを、考えながら学習しましょう。

三つの文のつながりを考えながら学習しましょう。

(一) 屋根うらのオルガン

この文を読んで、話ができるようにしましょう。

なぜ、ヘンデルは屋根うらなどについてオルガンをひいたのでしょう。音楽家についてあなたが知っていたら話をしましょう。

この文を読んで感じたことを話しあいましょう。

(二) 共に働く

この文を読んで、まとめて話ができるように

新しいことば

ベージ	4	はねかえ(つて)	は(つて)	はらい(落して)	14	織物業	発展	自動織機	
	5	庭ぼうき	しもばしら	ノート	15	いじ(ったり)	いなか	一生	
	6	雪まみれ	やきいも	紙ぶくろ	18	いどばた	きまりわる(そう)	大工	
	7	つばき	炭焼き	ヘッドライト	19	気ががい	日なた	博らん会	
	8	大通り	両側	買いだし	20	齒車	てこ	まったく	
	9	こぼう	ねぎ	れんこん	21	小首	試運転	最前列	
	10	いきいき	貯蔵法	くせ	21	はるか(に)	複雑	貧弱	
	11	長もち	それぞれ	もみから	22	改良	木製	人力織機	
	12	つけもの	くだもの	手おけ	22	にじむ	軽快		
	13	手かご	ざる	反物屋	23	機台	むせび(ないた)	ただち(に)	研究費
	14	雑貨屋	日用品	かざりまど	24	むせび(ないた)	ひるがえ(す)	自動的	つな(ぎ)
		かざりまど	たび	織物		スイス			

(三)

アルプスの牧童

あなたも「心に深くきざまれてる」ことがあつたら話しましょう。

今の世の中どくらべて話しあいましょう。

あなたも「心に深くきざまれてる」ことがあつたら話しましょう。

アルプスの放牧はどんなにして始まり、どんなにして終るのでしょう。

この文に出てくる牧童について、思ったことを書いてみましょう。

この牧童とあなたの考えかたのちがいについて話しあいましょう。

あなたも、この文を読んで感じたことを話しあいましょう。

「えらい人」と「いい人」についてみんなで話しあいましょう。

あなたは、どんな人になるために勉強していますか。そのことを作文に書いてみましょう。

この本には、おもにどんなことが書かれていますか。

この一か年の国語の学習について反省をしましょう。反省したことを話しあいましょう。

この一年間、国語で学習したことを、まとめる仕事をしましょう。

五年になったら、あなたはどんなにして国語の学習をしたいと思えますか。

71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56

政治 書記 裁判所 疑問 ちがい(ない) 成績 乗馬 日数 とき(された) まるまる(と) 考え方 天使 ねまき オルガン ほんやり まっさお とつく(に) ぼうや

かかわる 裁判官 ただよ(って) 賞品 ギリシア語 かしこ(そう) 家族 肥え(て) 天オ 天才 まっ先 階だん 手ほどき 自作 告げ(ました) しか(りつけ) おどおど 近所

法律 手助け

84 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72

中心 詩 助手 光景 逆に 海ばつ 放牧 いっせい(に) 教育 対し(て) (働き)かけ(て) 単純 規則 除(いた)

わ(いて) ちらしぼり 番犬 毛なみ どうげ 牧草 (七)合目 雪どけ 話題 現在 実現 話題 山国 水かさ けいしや面 高原 かつてな みはから(って) ひそかに 愛(して) 親しい

わ(いて) ちらしぼり 番犬 毛なみ どうげ 牧草 (七)合目 雪どけ 話題 現在 実現 話題 山国 水かさ けいしや面 高原 かつてな みはから(って) ひそかに 愛(して) 親しい

41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24

特許 一变 気つか(って) 女工 辞書 正確 筆順 漢字 場合 ひらがな 外国語 (三)学期 備え(つけて) 書だな 理科 百科辞典 まちまち 投書ばこ

視察 夫人 速度 図書室 どころで (五)画 辞典 国語辞典 漢和辞典 自信 元日 綿布 (読み)かけ 部厚い ページ

読書週間 P・T・A. (色)とりどり (ひとり)あたり 雑 以上 植物 貸しだし票 書名

56 55 54 53 52 51 50 49 47 46 45 44 43 42

作曲家 祖國 会長 童話 指折り 里 かねい うわ目 正直 きりぬき帳 まえがき 材料 感想 口絵 たな 広告 本屋 きのき(あけて)

あわただし(く) おくさま 愛(して) 親しい 名人 質素 ぼっちゃん 疑う よしあし 人がら だりや あどがき (書き)そえ(て) (切り)ぬ(いて) とじ(こむ)

移 (78)	官 (70)	相 (51)	庫 (36)	得 (24)	複 (21)	焼 (6)
富 (78)	除 (71)	素 (52)	備 (36)	比 (25)	改 (21)	炭 (7)
逆 (78)	律 (71)	童 (52)	貸 (40)	視 (25)	良 (21)	蔵 (9)
詩 (82)	規 (72)	愛 (54)	票 (40)	綿 (27)	軽 (22)	雑 (13)
	則 (72)	認 (61)	氏 (40)	辞 (28)	快 (22)	無 (14)
	单 (73)	婦 (62)	著 (42)	確 (29)	布 (23)	言 (14)
	純 (73)	績 (67)	適 (42)	漢 (31)	満 (23)	織 (14)
	現 (75)	賞 (67)	基 (42)	典 (31)	点 (24)	招 (14)
	在 (75)	判 (70)	想 (44)	和 (32)	特 (24)	続 (18)
	牧 (76)	寄 (70)	疑 (49)	期 (35)	許 (24)	帳 (20)

本書の中、とくに新しく執筆を依頼したものは次の通りである。

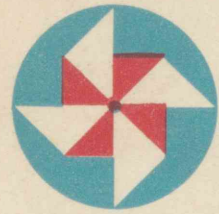
アルプスの牧童 世界少年より

さしえ

関合正明 楢原健三
 浜野正義

河野鷹思
 そうてい

新国語 四年 下		昭和二十五年九月十四日 印刷
小国 428		昭和二十五年九月十八日 発行
足あと		定価 円
APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION (DATE SEP. 14, 1950)		
著者	八木橋雄次郎	東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
発行者	光村図書出版株式会社	東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
印刷者	株式会社 光村原色版印刷所	東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
代表者	大江恒吉	
代表者	光村利之	
発行所	光村図書出版株式会社	東京都品川区東大崎一丁目五三二番地



4
下

なま光

広島大学図書

広島大学図書

0130449972



光村図書出版株式会社

文庫

50

972